

九月の土曜日

井上光晴



の土曜日

井上光晴



潮出版社

九月の土曜日

©一九七七
検印廃止

昭和五十二年十月五日 印刷
昭和五十二年十月十五日 発行

著 者 井 上 光 晴

発行者 富 岡 勇 吉

発行所 株式会社 潮 出 版 社

東京都千代田区飯田橋三一一三
電話 東京(03)230〇七四一(販売部)
230〇七八一(編集部)
振替 東京五一六一〇九〇
郵便番号一〇二

(乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り
替えます)

印刷・製本 凸版印刷株式会社

目次

黄色い顔の看守	5
紙の夜に	47
家紋のある壁	109
九月の土曜日	171

装帧
横尾龍彦

九月の土曜日

黄色い顔の看守

死者のいない通夜にしても、みな少しはしゃぎすぎるように思えた。トウガンは脇腹に両手をあてて、断末魔の呻きを繰返していたし、黄村は黄村で、殺された嘘ツキのもったいぶったよそ行き言葉の口真似をしてはしきりにみなを笑わせた。東京の医療少年院とくらべればこの施設はまるでばらいそさ。少なくとも名前だけは職業補導所だし、週一回の外出だってできるもんな。まだ渾名もついていない新米の少年は小さな頭を振って、ばらいそばらいそとうれしそうに呟き、それから何を思いだしたか、にやりと口もとをゆがめた。おれは嘘ツキが殺される前日、つまり一昨々日の昼休みのことを考えていたが、食事を終えたあと、食堂の板壁に背をつけて日向ぼっこをしながら、彼が話しかけたのだ。

「君の親父さんは何してる」と嘘ツキはきいた。

「親父」おれはいった。「親父はおらんよ。親父もおふくろもおらん」

「ずっと前のことさ。子どもの時分……」

「子どもの時分もおらんよ。おれは初めからひとりだったから」おれはいった。サボが鉄棒の蹴上りに失敗して尻餅をつき、廻りで起った笑い声が鉄棒の所からではなく、ずっと向うの見えない岸壁の方からきこえてくるような気がした。

「そうか」嘘ツキはいった。「まあその方が気楽でいいよ。おれの所はひどかったからね。親父が病氣しとる時、おふくろが十歳も年の違う若い男とくっついたんだ。その若い男は兵隊にも行かずに、親父がまだ家におる時分から、しょっちゅう弟子みたいに家に来とった。親父は胸がわるくて療養所に入とったんだよ。ちょうどその時、御殿女中みたいな髪をかぶった女の出てる芝居がかかっていた。おれは見に行かなかったが、おれの家の戸袋にかかったポスターを見て、同級生が話してきかせたんだ。その女は金持ちの家に来た継母で、若い番頭かなんかと仲よくなつて家乗っ取ろうとしていた」

「芝居の話か」とおれがいうと、「いや、そうじゃない」と彼はこたえて、つづけた。

「おれの家の戸袋に芝居のポスターがかかっていたことはいまいったらう。劇場から若い衆が廻つてきて、ポスターを貼るのを承知すると、半額で行ける切符を二枚か三枚くれる。半額券が二枚あつても只で行けるわけじゃないが、貼る場所はたいがいきまつていて、おれの家もその中の一軒だったよ」

「ふーん」と、おれは口の中でいった。サボはまだ蹴上りに失敗したが、尻上りの動作に変えて、かろうじて鉄棒の上に腹をつけた。

「さっきも話したが、そのポスターには御殿女中みたいな髪をかぶった継母が、菡萏を口にくわえて、化け物みたいな影を障子に映している場面が絵に描いてあった。菡萏を口にくわえるとぶらぶら揺れるから、大きな口がぶらぶら揺れ動くように見える。主人は病気で入院しているから

家にはいない。それで継母はそんな恰好をして前妻の子どもをいじめていたんだな」

おれはサボと交替して鮮やかに蹴上りをやる食パンを見ていた。食パンはさらに鉄棒を逆手に持ちかえて、体を一廻転させたが、どういうわけか、わっとはやしたてる声が上がった。太陽は照っているのに、じめじめとした海風がしょっちゅう首筋から入ってくるような、落着かない天候だった。

「そういう継母の絵を描いた芝居のポスターが家の戸袋にかかっているね」

「きいたよ」おれはいった。「もう何度もそういうたじゃないか」

彼は鼻をすすり、指で鼻の下をこすった。「そのポスターのかかっている戸口にばあちゃんと二人で立っている時、若い男とおふくろがどこからか帰ってきたんだ」

鉄棒の横のコンクリート塀にできた日溜まりに十人余りの仲間が並んでいるのをおれは見た。

彼等のうちのひとりが何のつもりか、拳闘選手のような恰好で輪を作った両手を高く差上げ、もうひとりが腕を引っぱってその輪をこわそうとしていた。

「妙な気分になってね」嘘ツキは言葉をついだ。「別にポスターを見て、ばあちゃんと二人で若い男の悪口をいうとったわけじゃなかったが、つい妙な気分になって、それから若い番頭はどうして主人を殺したとね、とばあちゃんにきいてしまったんだ。実際に目の前に立っている若い男とおふくろの前でね。いきなりそんなことをおれがいいだしたんで、ばあちゃんはびっくりして、安雄、何をいうか、そんなこと何も話もしておらんじゃないか、としどろもどろになって弁解し

たが もう間に合わないさ」

「どうしてまたそんなことをいうたとかね」

「本当は反対のことをいおうと思っていたんだ。継母の絵の出たポスターの前にばあちゃん二人で立ってはいっても、そんなおふくろの男のことなんか話していたんじゃないということをいおうとして、口から反対の言葉が飛びだしてしまったんだ。……」

嘘ツキの声にはいつものはりがなく、どこかさかさとしてるようにきこえた。その時、正門の所に黒っぽいオーバーを着た男があらわれ、狭い運動場を横切って、まっすぐ職員室の方に歩いて行った。

「大橋看守がきたぞ」おれはいった。「この前の話のつづきをしにきたのかもしれん」

嘘ツキはぎくつとしたように大橋看守の方を見ながらいった。

「あいつの話は信用できんよ。海軍兵学校を病気で中退したとかいうとったが、あれはまるっきり嘘っぱちだからね」

なぜそれがわかる、というおれの視線を受けて彼はこたえた。

「このあいだ、宿直室で指導員同士が話しているのをきいたんだ。大橋さんの経歴は本当は師範学校の中退らしいという話をしていた。そうすると海兵は幽霊かといって笑ったよ。おれが行くとびたつと話をやめたが、おれはもう戸口の前で話をきいてしまっていたからね」

「そうかね」と、おれはいった。

「そうさ」彼の声は少し生き生きしてきた。「あいつの海軍兵学校が幽霊なら、この前の自殺の話は全部いんちきになる」

日溜りの喚声がふたたび見えない繋船場の方からきこえてくるような気がして、おれは顔を上げた。二週間ほど前、昼休みを三十分延長して、所長が大橋看守に図書室で戦争中の話をさせたのだ。大橋看守は準備した草稿を幾度もおさらいしてきたような、よどみのない口調でしゃべった。

「昭和二十年の五月、私は偶然佐世保駅で、かつての同期生である江国中尉に出会いました。よう、と私が声をかけると、江国中尉は、いま大村にいる。近く突っ込む、と口早にいうんです。特攻か、と私がきき返すと、彼は黙ってうなずきました。私は愕然となって、面会に行っていたかときくと、さあ大村にはいつまでいるかな、と彼は返事しました。大村というのは、いま飛行場のある大村海軍航空隊のことです。」

それから一週間後、私は大村に江国中尉をたずねました。暗い面会室にあらわれた彼は、私を見て一瞬顔をくもらせましたが、すぐ固い笑いを浮かべたのです。もしかすると誰か別人が面会にくるのを予期していたのかもしれませんが。私はあとでそう考えたのですが、その時は気づきませんでした。

一時間しかないよ、と江国中尉はいいました。一時間しか面会する時間が許されていないといふんです。その一時間のあいだに何をしゃべったか、もう夢中でした。ただ一つはつきりおぼえ

ているのは、これを読んでくれといって私が差しだした本を、もう読む時間がないからといって江国中尉が受取らなかったことでした。本というのは長與善郎の『乾隆御賦』という小説で、戦争中私が愛読していたものでした。それを、読む時間がないからといって断られたのですから、江国中尉の言葉は私を突き刺しました。屈辱とも感動ともつかぬ衝撃が、熱い全身を駆けめぐって、私は何ともいうことができませんでした。

そして思わず私は叫ぶようにいいました。江国中尉、貴様だけを死なせはしない、おれも死ぬ。貴様が突っ込むのと一緒におれも必ず死ぬ。約束する。私はそう誓ったのです。おそらくみなさんはこういう感動を理解できないと思いますが、本当に私は同期生の江国中尉と一緒に死んでもいいと思ったのです。江国中尉は何をいいたのかという顔をして私を見ました。そして、死ぬのはおれひとりではないよ。まあがんばってやってくれといいました。

その声の調子の軽さがまた、私を打ちのめしたのです。江国中尉は私を同期生だと考えていない。私はそう思いました。江国中尉、嘘じゃない。おれは言葉だけでいっているんじゃない。貴様が死ぬ時は必ずおれも死ぬ。きつとそれは約束する、と私は誓いました。すると江国中尉はこともなげにいうのです。おれは明日出撃するよ、四、五日したら沖繩の海の中だ。……

江国中尉の声はまるで嘲笑するように私の耳にひびきました。四、五日でもかまわん、おれもきつとやる。私はうつろのような気持で、しかし強いきりました。それから十日ほど経ち、第何次かの特別攻撃隊の沖繩突入が報道された日、私は自殺をはかったのですが、睡眠薬をあま

りたくさん飲みすぎたので、反対に吐いてしまい、かえって死にきれなかったのです。……」

日溜りに並んでいる仲間の列がくずれ、今度はうまく蹴上りしたサボが鉄棒の上から何やら高い声で叫んだ。

「第一、刑務所の平看守が、ただこの所長と仲がいいということだけで、おれ達に説教にくるのはおかしいじゃないか。あんたはそう思わないかね」

「うん」おれはあいまいな返事をした。

「あいつが海軍兵学校の生徒だったことがいんちきなら、特攻隊員のことも何もかも、みんな作り話になってしまう。海軍兵学校に入学してもいない者に海軍中尉の同期生がいるはずがないよ」

海軍兵学校の生徒だったことが嘘なら、確かに海軍士官の同期生がいるはずはない。おれはそう思ったが、嘘ツキの口ぶりがいやだったので反撥した。

「海軍兵学校にいたことが嘘でも、海軍士官の特攻隊員と約束したことは本当かもしれんよ」

「そんなはずはなからう。そんなはずはないよ」彼は傷つけられたような声を出した。「同期生でもなんでもない者と約束するはずがないじゃないか。同期生でもない特攻隊員が出撃するのに、どうして一緒に死のうなんて約束する」

「それならどうして大橋看守はあんな話をしたのかね」おれはいった。

「あいつはそんな男なんだ。人をだましてばかりいる。……」

「大橋看守を前から知っとるのか」

「いや、どうして」彼は反問した。

「そんなふういきこえるからさ」おれはいった。

「あいつは自分をよく見せようと思うからさ。特攻隊と約束した通り、あとで自殺したといえ、便特攻隊と同じように見えるからな」

「それだけかね」

「え」彼はおれを見た。

「ただ自分をよく見せようと思って、それだけで、大橋看守はあんな話をしたのかね」おれはいった。大橋看守のことなどどうでもよかったのだが、自分を棚に上げた嘘ツキのいい方に、だんだんむかついてきたのだ。

「じゃあんたは、あいつが話したことを信用しとるのか」

「どうでもいいと思うとるんだ。本当でも嘘でもね。大橋看守が特攻隊員のあとから自殺しようがしまいが、おれには関係ないよ」おれはいった。

「えらいしんみり話しとるやないか」のっぽの山崎進がそれだけをいうように近寄ってきて、便所に入った。

嘘ツキはちっと唇を鳴らし、両方の掌を合せて意味もなくごしごしとこすった。それから、たぶんこういふだろうとおれが考えたことを彼はいった。